

もくじ

鋏形蕙齋《自綾瀬川観墨水図》… P1

行政文書に見る足立区の水害記録(十五)… P3 二世谷文一による一作… P3



図 1 鋏形蕙齋《自綾瀬川観墨水図》 絹本着色 江戸時代後期 当館蔵

足立史談

第 629 号

2020 年 7 月 15 日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

鋏形蕙齋《自綾瀬川観墨水図》

— 綾瀬川から眺める江戸名所 —

加藤 ゆずか

埼玉県の東部から南流し、草加付近から東京都足立区に流れ込む一級河川、綾瀬川。江戸末期の地図をながめれば、隅田川や荒川といった大河川と合流する綾瀬川流域は、舟が行き交う内陸水運が盛んな地であると共に、農業用水を利用した耕作地が広がる場所でもあったことがわかります。暮らしに必要な物資をもたらす。暮らしに必要な物資をもたらす。日々の食料を生み出す綾瀬川とその周辺地域は、足立の人々にとつて、古くから生活に密着した身近な場所であったことをうかがい知ることができます。

そんな綾瀬川から隅田川を眺めた真景図(実在する景色を描いた絵画)が、江戸時代後期の絵師、鋏形蕙齋(くわがたけいさい・一七六四〜一八二四)が描いた《自綾瀬川観墨水図》(図1)です。今回は、鋏形蕙齋という絵師と、その作品《自綾瀬川観墨水図》について、ご紹介いたします。

■浮世絵師からお抱え絵師へ 鋏形蕙齋は、江戸の畳商の子として生まれました。はじめは浮世絵師の北尾重政に師事し、北尾政美(きたおまさよし)という名で浮世絵師として活躍します。

師の重政が江戸の書肆、須原屋茂兵衛の親類縁者であったことから、また蕙齋の兄弟子にあたる重政門下

に、山東京伝や窪俊満といった戯作者としても活躍する絵師の存在があったこともあり、蕙齋こと政美も黄表紙、洒落本、噺本、滑稽本、地誌随筆類といった多様な版本の挿絵を多く手がけました。

蕙齋は、寛政六年(一七九四)に、津山藩(現岡山県津山市)の御用絵師に召し抱えられ、さらに同九年(一七九七)には木挽町狩野家の狩野養川院惟信(かのうようせんいんこれのぶ)に師事し、狩野派の絵師となります。町場で活躍する浮世絵師から、藩の御用絵師といった公の絵師に抜擢されるという経歴は、大変珍しいものです。この頃より、蕙齋は浮世絵師としての「北尾」姓を改め、母方の姓「鋏形」を本姓としています。御用絵師になってからの蕙齋は、手描きによる肉筆の作品も手掛けるようになります。その画題は、注文主の依頼に合わせて人物風俗・花鳥・山水と様々に描いていたようですが、中でも文化六年(一八〇九)に描いた、江戸全体を一望する鳥瞰図屏風、《江戸一目図屏風(えどひとめずびょうぶ)》は話題を集めたようで、蕙齋はこれを描いた後に、類似した江戸鳥瞰図を木版の摺物でも登場させています。

当館にもその一点、《江戸名所之絵》(図2)が所蔵されていますが、遙か高い所から見下ろした構図で江

戸の市中を描いています。本図は、橋や川、神社仏閣といった、江戸名所と呼ばれる景物を地名入りで描き込んでおり、蕙斎が江戸の名所を理解した上で、このような鳥瞰図を描いていることがわかります。

こうした江戸鳥瞰図を制作するのと合わせて、蕙斎は江戸の各名所を盛り込んだ真景図も肉筆で多く描いています。今回紹介します『自綾瀬川観墨水図』は、その一つと考えられます。

隅田川の右手には鐘ヶ淵が広がり、木々が濃く描かれた左岸付近には僅かながら木母寺の屋根を、その奥には三囲神社の鳥居を見つけることができます。

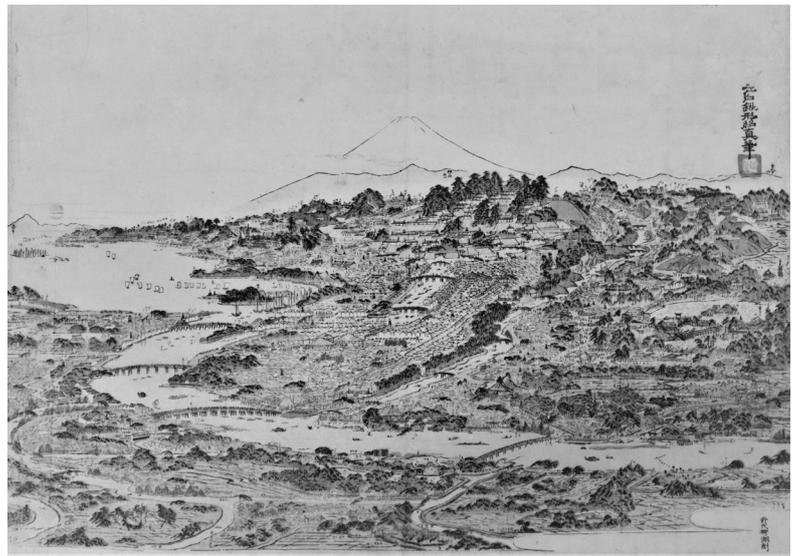


図2 鯽形蕙斎《江戸名所之絵》
木版彩色摺一枚 江戸時代後期 当館蔵

川観墨水図のタイトルは、画面左上の落款部分に「自綾瀬川観墨水」と添え書きがあることに由来します。「墨水」とは隅田川のことを指し、その名の通り、画面右下にみえる、橋がかかった綾瀬川が流れる方角から、画面中央に広がる隅田川を望む構図となつています。

隅田川の奥には浅草から上野の景色が広がり、遠景中央から右にかけて、江戸名所である浅草寺・浅草

本願寺・上野寛永寺とおぼしき屋根がみえます。さらに寛永寺の後ろには、薄墨を用いた外隈で富士山を描いています。

この三箇所も、江戸の名所として知られる場所でした。

一方、画面下部の綾瀬川周辺に目を移せば、橋の周囲には曳き舟の様子や橋を渡る人物が描かれ、右手の木々が茂った向こうには隅田川を行く帆掛け舟の姿が見えます。岸沿いに左に視線を向けていけば農村地帯が広がり、馬をひく人物や天秤棒を担いで歩く人物も見られます。雄大な景観の中、極々小さく、簡素な筆致で描かれたこれらは、農村地帯でありながら、舟運豊かなこの地の牧

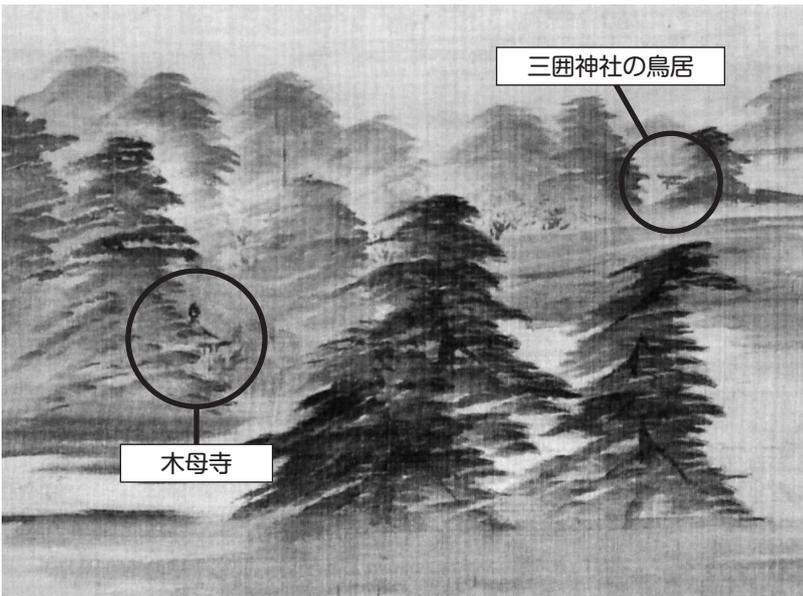


図3 隅田川左岸に描かれた木母寺と三囲神社の鳥居

歌的な雰囲気を伝えていきます。

先述した通り、綾瀬川は流域住民の生活に密着した河川である一方で、夏には合歓の花が咲き、秋になれば虫の鳴き声と月光を楽しめる行楽地として風流人から親しまれ、江戸の名所を網羅した『江戸名所図会』（文政十二年序）や『絵本江戸土産』（嘉永三年刊）などの地誌類にも取り上げられるほどの名勝地の一つでした。本作は綾瀬川という江戸名所から、墨田川流域の江戸名所を眺めるといふ趣向がうかがえるのです。

以上のように、『自綾瀬川観墨水図』は、綾瀬川から、鐘ヶ淵・向島を通して浅草・上野、さらには富士山を眺めるという、かなりの広範囲を一画面の中におさめつつ、浅草寺や寛永寺、木母寺といった、それぞれの江戸名所たる特徴的な景物を、細かく描き込んでいることがわかります。これは、江戸全体をパノラマのように描きながら、各名所を盛り込ませた蕙斎の江戸鳥瞰図の延長線上にある表現と言えます。

一見すると、墨画淡彩のあっさりとした画面ですが、絹地に金泥を裏刷き（絹の裏側に絵の具を施す技法）して、画面全体が鈍い光を放つ瀟洒な本作は、蕙斎の江戸名所を描いた真景図の中でも、力を入れた逸品といえるでしょう。

（郷土博物館専門員）

行政文書に見る

足立区の水害記録(十五)

山崎尚之

■日誌【九】(明治四十三年水害)

八月十七日は曇り空でした。この日も郡役所への来庁者が記載されていきます。

午前八時に東京府の職員が来庁しました。九時には千住町長が来庁しました。九時五十分には先の東京府職員が帰りました。

■伝染病の発生

同時刻、東洲江村で伝染病が発生したとの報告がありました。『都新聞』八月十九日条には、「当局者の語る所によれば四十年水害後同年十二月迄の間に虎列刺患者百六十九人を出せし例により、今回の水害にも該病を発生すべき模様なれば各自の衛生は勿論当局者も之れが予防に就いては充分なる研究をなす筈にて、昨日警視庁に開かれし防疫評議員会の会議に提出されし由にて、又一昨日千住及び荏原郡には既に一名宛の疑似患者を出せりと」とあり、コレ

ラが疑われる患者が出ていることが記されています。この年(明治四十三年一千九百一十一年)に全国でのコレラ患者数は二千八百四十九人、死亡者数は千六百五十六人に及び(ちなみに明治四十年は全国患者数三千六百三十二人、死亡者数千七百二人)、

規模は大きくないものの流行を見ました。江戸時代後期から明治時代にかけてコレラは何度か大流行し、明治十二年と十九年には全国の死亡者数が十万人を超えました。また、四十三年の八年前の明治三十五年にも流行があつて、患者数は一万二千人、死亡者数が八千人を超えました。このような何度もの大流行が過去にあったため、郡役所では伝染病(コレラ)の発生の原因となる衛生状態の悪化は気になっていたことと思えます。また、この新聞記事では、千住・浅草・本所・深川・下谷などで陽チ

フス三十三人、赤痢十二人の患者が発生したことも記載されています。

■さまざまな来庁者

十時に梅島村長が出頭しました。十時十分には郡長・郡役所職員らが綾瀬村・東洲江村に出張しました。十時二十分に郡会議長が来庁しました。十時二十五分に富岡府会議員(富岡彦太郎 明治三十五年〜四十年の千住町長)が来庁しました。十一時二十分には花畑村収入役が出頭しました。その一分後に報知新聞記者が来りました。午後零時二十五分に千住町助役が中組河原に渡船場を開設することです。この件について千住青物市場の星野氏他五名が来庁しました。『都新聞』八月十八日条には、「昨日午前より(千住大橋での)唯人の往來を許し、新開橋は

御用船を以て通ずる事となり、千住青物市場も開けたり」とあります。中組河原の渡船場の開設とは、流失した新開橋の代わりの渡船の実施のことでしょう。千住青物市場の関係者の来庁も市場の開設の相談のためでしょう。日誌の記事は、この新聞に記されたことの準備のための来庁を述べたものようです。

二時に東京府技師前田氏が来庁しました。二時五十分には、芝増上寺の住職二名が来庁し、罹災者へビスケットと阿伽陀薬(仏教用語で薬のこと)各三十包を寄贈してくれました。三時に近衛師団下谷患者救護隊の医長秋田友男氏が来庁しました。同時刻に本郷区の篤実会の代表員が寄贈品を携帯してやってきました。また、この時間に出張していた職員が帰りました。三時四十分には興

国銀行(南足立郡千住町にあつたらしい。全国銀行協会の銀行変遷史データベースによれば前身は足立銀行。現在の宮崎県の宮崎銀行に繋がるといふ)の銀行員が寄贈金のことを出頭しました。同時刻には、明治座の座員が寄贈品のことを出頭しましたが、寄贈者の指定によって西新井村へ寄贈することとなり、この話は西新井村役場に送りました。四時には内務省衛生局長の窪田氏(窪田静太郎 一八六五〜一九四六 後藤新平のもとで日本の保健衛生制度の

確立に努め、明治三十年の伝染病予防法制定を推進した)が三名の職員を引き連れ来庁しました。これは、伝染病の発生に関連する来庁だったのではないかと考えられます。同時刻には網代町(現在の麻布十番の一部)同志会員が、罹災者への救助品の寄贈のことで出頭しました。午後七時三十分には、富岡府会議員がふたたび来庁しました。

(郷土博物館専門員)

谷文晁の孫

二世谷文一による一作

小林優

『足立史談』前号の「文化遺産調査ガイドブック稿」では、足立ゆかりの人物として、江戸時代後期の絵師、谷文晁(たにぶんちよう、一七六三〜一八四〇)を紹介し、文晁の孫で絵師としても活動した二世谷文一(たにぶんいち、一八一四〜七七)についても触れました。

千住酒合戦にも招かれ、早期から足立との繋がりが深い文人として注目されてきた文晁に対して、二世文一は、近年の調査によって足立の人々との深い親交が確認された一人です。今回は、当館の所蔵となった二世文一による一作を紹介します。

■二世文一という人物 二世文一に



図1 谷文逸(二世文一)画・不白賛《土人形図画賛》紙本淡彩 当館蔵

については、平成二十九年度に開催した文化遺産調査企画展「谷文晁と二人の文一」で詳しく紹介されていますが、改めてその経歴を概観すれば、文化十一(一八一四)年、文晁の養嗣子で絵師の一世谷文一の長男として生まれ、以降、幼い頃から絵の修行に入ったと推測されます。

その後の活動は不詳な部分も多いですが、少なくとも嘉永初年までには宮津藩(現・京都府宮津市)本庄松平家の家臣となつて同地に暮らし、

幕府の派遣する万延遣米使節の一員としてアメリカに渡るなど稀有な足跡を残した後、明治十(一八七七)年、宮津で没しました。

父の一世文一とは五歳の頃に死別したものの、祖父文晁と早くから活動を共にして交友関係を共有していたと見られます。特に現在の足立区江北大地域の豪農で、文晁門下であった船津文測(ふなつぶんえん、一八〇六〜五六)との親交は深く、宮津へ居を移して後も頻繁に書簡のやりとりをし、江戸へ来る度に家を訪れるなど、文測が没するまで親しい友人であり続けました。

■二世文一の描く土人形の図 文晁と一世文一という、江戸画壇で華々しく活躍した二人の血を引き、十代半ばには絵師として活動を開始していたと見られる二世文一ですが、確認される作品は驚くほど少ないと言わざるを得ません。

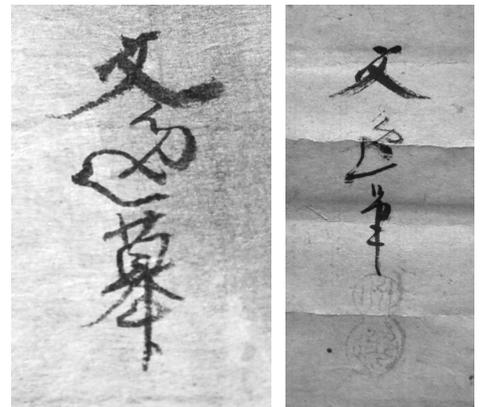
二世文一は、絵師としてははじめ「文権(ぶんけん)」と号し、その後、文政十三(天保元、一八三〇)年頃に「文逸(ぶんいつ)」と改めて、さらに天保三〜七(二八三二〜三六)年の頃に、早世した父の号を引き継いで「文一」を名乗ったと見られます。船津文測の家に伝わった船津家美術資料をはじめ、各地に残る文晁らの資料類の中には

「文権」「文逸」の署名のある模写類が一定数確認できるものの、この二つの号の時代も含めて二世文一の作と断定できる本画(完成された作品)は極めてわずかです。これは、少なくとも三十代はじめまでに宮津へ移ったことも一つの要因と見られますが、何より、文晁の後継者として名を馳せた父と同じ号を名乗った故に、その後の画業が父の名の影に隠れてしまい、「文一」署名の作品が二世文一のものとして認識されづらくなつたことが大きかったと考えられます。

その中で、二世文一による希少な本画として確認されたのが、区外個人の方より当館へと寄贈された、『土人形図画賛』(図1)です。

この作品は、縦二十八・五、横五十三・〇センチの和紙に、墨と淡彩で布袋と小鳥の土人形を描いたもので、左端には二世文一が天保初年まで名乗っていた「文逸」の署名と朱文瓢印がされています。絵の右には「饅頭食ふ庵には留主にて冬こもり」の俳賛が、「不白書」の署名と「隨閣庵不白」の朱文方印と共に記されます。不白といえは江戸千家の祖である十八世紀の茶人、川上不白(かわかみふはく)が想起されますが、二世文一の活動時期とは合致せず、この「不白」は号の継承者か、もしくは全く別の人物と推測されます。

「文逸」の署名は船津家美術資料



左：船津家美術資料「雲龍図 模本」の署名
右：《土人形図画賛》の署名

中の模写類に記される署名と筆跡がほぼ一致し、この作品が、二世文一が「文逸」を号した天保初年のわずかな期間に描いたものである可能性を示しています。俳賛と共に、簡略化された少ない線描と色彩で描かれた本作は、十代半ばの若き二世文一が文晁以来の書家や俳人、茶人といった文人たちの輪の中で活動し、彼らと共に書画や句歌の共作を楽しむ環境に居たであろうことを感じさせるのです。

郷土博物館では、引き続き二世文一に関する調査を行っていきます。本作のような限られた作例を一点一点調査していくことで、二世文一の活動が少しずつ明らかとなり、その作品を浮かび上がらせていくことへとつながっていくでしょう。

(郷土博物館学芸員)